

EurekaXIII

六年制通信 No.14 令和7年7月4日(金)号

どこを見るか

「百里を行くものは九十をもって半ばとする」という、たぶんこれは何らかの漢籍にある言葉でしょうが、何事も最後まで行かなくてはちゃんと仕上げるまで油断してはならない、あと少しというところまできて道半ばであると考えているくらいでなくてはならない、という意味でしょう。それほど物事を最後まで仕上げるのは難しいという古人の戒めですね。芥川龍之介の「九十九里をもって半ばとする」も有名で、私はむしろこちらの方をよく覚えているのですが、実はこれは『侏儒の言葉』で「天才」に対していっている言葉です。全文をあげると「天災とはわずかに我々と一步を隔てたもののことである。ただこの一步を理解するためには百里の半ばを九十九里とする超数学を知らねばならぬ」です。これはこれで、なるほどその通りですね。

芥川が天才の定義はともかく、仕事をするにしても勉強をするにしても「百里を行くものは九十をもって半ばとする」というのは非常に正しく思えるのですが、最近ふと以前に通信で書いた柴野栗山のエピソードを思い出して、何を考えどこに視点を置くかによって「百里の道も一里に思える」ことがあるのではないか、そしてこちらの方が「百里を行くものは九十をもって半ばとする」よりもずっと大切なのではないかと考えるようになりました。柴野栗山のエピソードは次の通りです。

栗山(りつざん)が学問の志を持って京都から江戸に向かいます。歩き出してすぐ、物見遊山の旅人たちに出会います。しばらくその人たちと言葉を交わしながら歩いていくと、やがてみんなは彼の歩く速さについてこられなくなりました。別に彼だけが特別早足で歩いたわけではないのですが、気がつくやうに集団の先頭になり、後ろが見えなくなるほどの差がついてしまうのです。何故歩く距離に差がついたのでしょうか。彼はこれを「どこを目指して歩いていたか」によるとしています。物見遊山の連中は京都のはずれくらいを目指して歩いていたのですが、自分は今から江戸に向かわなくてはならない。その心構えが既に違うのだというわけです。遙か遠くを目指して歩き出している自分には、京都のはずれであろうと琵琶湖のほとりであろうとほんの通過点に過ぎません。物見遊山の連中がゴールとする地点とは比較にならない遠くを目指している。だから足に気迫があったのだ、と彼は言うのです。学問の道も同じです。初めの一步を踏み出そうとするとき、どこを見て歩き出すがその後大きな差となって現れます。遙か遠くを見て勉強している人の足取りは、強く弛むことなく、この辺でいいだろうという妥協もありません。やがては歩む距離に大きな隔たりが出るはず。彼は江戸へ向かう自分の気概と遊びで歩いている人との差をもって、学問の戒めにし

たのです。こういうところが偉いですね、昔の人は。

ちなみに栗山は、学問に対する三つの戒めを残していますので書いておきます。これら三つの戒めは「進学の喩」とか「進学三喩」とか言われ、今に伝わっています。

- 進学三喩
- ・志は遠大にして日々これに勤むべし
 - ・初めに謹みて正道より入るべし
 - ・小成に安んぜず大成を期すべし

さて、栗山が京都から江戸に向かう足取りは軽く、希望に満ちたものだったでしょう。それはもちろん江戸で学問ができるという期待感がそうさせるわけです。彼にとっては文字通り百里の道も一里ほどにしか感じなかったと思います。この「できるようになりたい」あるいは「強くなりたい」とか「わかるようになりたい」という気持ちが最も重要なんですね。この思いが強いほど苦労より楽しみが勝つ、そんな気がします。君たちの勉強も同じではないかと思うのです。わからなかったことがわかるようになる喜び、できなかったことができるようになる楽しさ、それらをすでに身をもって知った生徒諸君はたくさんいることでしょう。そういう生徒にとって勉強は苦痛より喜びを与えてくれるものになります。私はそうであってほしいと思います。

そう言えば、思い出したことがあります。何年か前に藤井七冠が他の棋士たちとインタビューを受けていました。将棋の神様がいたら何を願いますかと。他の棋士たちは、長くプロ棋士でいさせてほしい、もっと強くしてほしい、タイトルを獲らせてほしいなどと言っていましたが、藤井七冠だけは「神様と一局将棋を指させてほしい」と言いました。強くなりたいと願っている人にしか言えないセリフですね。

今週のおすすめ

・原田マハ 『旅屋おかえり』 (集英社文庫)

「あなた、お仕事は?」「はい、旅屋です」。どうです、こんな会話。タイトルに惹かれて読みました。素敵な物語でした。お勧めします。

元アイドルで今は「ちょびっ旅」一本で活躍中の丘えりかこと「おかえり」が主人公。旅が大好きな「おかえり」ですが、番組中にスポンサー名を間違って連呼してしまい「ちょびっ旅」はあえなく終了。しかし「元プロボクサー、いま社長」が売りの事務所社長と考えたのが、旅代行サービス。何らかの都合により旅のできない人の代わりにおかえりが旅をして「成果物」を持って帰ってくる、という新商売。成果物とは依頼者との話し合いで決まるのですが、ビデオに撮ってくるのが多いようです。報酬は要相談。しかし、よくまあこういう設定を考えつくものですね。

物語の後半では、何と旧スポンサーの大企業の会長直々の依頼が舞い込みます。うまくいったらもう一度「ちょびっ旅」のスポンサーになるとのこと。社長以下スタッフ一同当然大喜びで飛びつくかと思いきや、依頼の内容を聞いた途端おかえり以外は手を引いてしまいます。それどころか社長が失踪(?)。謎を抱えたまま、おかえりは会長の依頼を遂行しようとしますが…。これ、映像化されそうだけどもなあ。

BGMは 稲垣潤一の 夏のクラクション でした…。